探梅行

森岡　正作

河豚糶らる袋の中に殺気満ち

大嚔背後に座敷童ゐる

悩みごとばかり聞かさる探梅行

微酔の頭上に降り来鬼は外

立春の声の弾みて出勤す

山水の絵にゐるやうな春の雪

卒業子跳べ青春のラージヒル

春の雪

二月七日から八日にかけて春の雪が降った。夜中に外を眺め「積もるつもりなんだ」と呟いたが、はたして朝は久しぶりの雪景色であった。そして雪は裏山を山水画のように薄墨色に染め、世の中の喧騒をすべて飲み込むかのように降り続いていた。登四郎先生の〈**春の雪こころに降らせ籠りゐる**〉という御句を『幻化』に見つけたが、先生の清らかな心の有り様が感じられるとともに、晩年の作と思えば静寂な境地をもって眺める「春の雪」には、先生の人生における喜怒哀楽の模様が包み込まれているように思われる。

私の育った雪国には「春の雪」という言葉がなかった。暦の上で「立春」が来ても、田舎では四月半ばであろうと雪が消えて初めて春が来るのであった。それゆえ私には「春の雪」と聞けば、三島由紀夫の『豊饒の海』の第一巻の『春の雪』が思い出され、季語の「春の雪」にしても何かしら情緒的に捉えてしまうのである。